

検天治本万葉集翻刻

〔要旨〕

検天治本万葉集は、平安時代に書写された万葉集写本、天治本を、江戸時代の国学者伴信友が模写した本である。天治本万葉集は、平安時代天治年間（一一二四―一一二六）頃に書写された万葉集の重要な古写本の一つである。現存するのは、卷十三、卷十五の零巻、卷二、卷十、十四、十五の断簡に限られる。江戸時代、京都曼殊院に天治本の卷二、十、十四、十五、十七が所蔵されていた。それを国学者の伴信友が、弘化二年（一八四五）にそれらの所々を模写し、袋綴じの冊子本に仕立てた（天治本は卷子本）。その模写は、虫食い穴まで丁寧に写し取る精密なもので、今に天治本の姿をかなり正確に伝えている。しかも、模写部分は、すべて天治本が現存しない箇所、きわめて貴重である。

天治本は、卷十三や卷十五にまとまった部分が残るものの、それら残存部分には、たまたま天治本の系統的特徴が顕著に表れた部分が少ない。一方、検天治本は、当時存した巻の所々を抄写したものであるが、そこには、系統上の特徴がよく現れている。天治本が忠兼本（仙覚校訂本の底本の祖本である重要な伝本）を書写したことが記されている巻二の奥書はもとより、天治本と他本との関係が明らかになる箇所が数多く残されている。

本書には、天治本を模写した部分と伴信友による注記（朱書）が見られるが、その違いを明確に提示し、天治本の模写本としての姿をなるべく忠実に翻刻しようとする。

〔キーワード〕：万葉集・検天治本・天治本・伴信友・模写

安井 絢子・古澤 彩子・田中 大士

検天治本解題

一

日本の古典文学作品の中で、万葉集は比較的古写本に恵まれた作品と言ってよからう。桂本、藍紙本、金沢本など平安時代書写の伝本が何種類か伝わっている。平安時代書写の伝本が皆無である源氏物語などに比べると伝本の状況はかなりよいと言わなければならない。しかし、平安時代書写の諸伝本はそのほとんどが一、二巻しか残らない状況であることも忘れてはならない。万葉集の古い本は、本当に一部にしか残っていないのである。万葉集のある巻のある歌を見るとき、その部分にもっと古い本があったらと望蜀の嘆きをかこつことは、万葉研究者ならばよく

体験することであろう。その嘆きを少しでもいやしくしてくれるのが模写の存在である。模写は、古写本をそっくり書き写したもので、万葉集の古筆断簡の模写を集めた木村正辞『万葉切』（東洋文庫蔵）などがある。だが、万葉集の古写本の模写ということになると、まず「検天治本」を筆頭に数えねばなるまい。

検天治本は、万葉集の平安時代の古写本天治本を国学者の伴信友が残存する巻の内を所々模写し、冊子本としてまとめた本である（天治本は卷子本）。現在京都大学附属図書館蔵。伴信友校蔵書第五一冊に「検天治万葉集」として所収されている。縦二七・三cm、横一八・八cm。本書中の注記などによれば、弘化二年、京の曼殊院に存した天治本五巻を模写したものと考えられる。当時の信友の天治本閲覧の記録はもう一つある。東京大学国文学研究室所蔵の伴信友書人の『万葉集略解』（国文学／上代／11.3／6）がそれである。この本には、天治本の巻二の校異が書き入れられている。その表紙裏に貼り紙があり、

大治四年
 ・二巻 全少欠 ・十巻 全少欠 天治元年
 天治元年
 ・十四巻 残欠 ・十五巻 残欠
 ・十七巻 残欠

合五巻 就年序今概称天治本或略云
 天本弘化二年四月校之伴信友
 此二巻中十五丁（歎管云々）より（長短）十四首欠見校語

別在検天治本万葉集一冊可合考

という記述が見える（朱書）。これにより、当時の曼殊院における天治本の残存巻とその残り具合がわかる。また、「合五巻」下の割り注の記述から、この本がおおむね天治年間に書写されていることから、信友が「天治本」と名付けたことが知られる。さらに、後ろから二行目に天治本巻二が「歎管云々」（一一八）から十四首（一三一まで）が欠けてい

ることを記している。この欠落部分の一部は、複製手鑑『養老』（昭和二七年）に仁和寺切として所収されている（一二六左注の途中（一三一））。

本書は、全部で二十丁、半丁分空白があるところが四箇所見られる。基本的に一丁裏表は同じ巻を写しているが、裏表で異なった巻が写されている例もあり、一箇所には、半丁に巻二と巻十の歌が写されている所もある（第七丁オ）。また、冒頭の部分は、最も巻の若い巻二から始まっているが、続く部分に巻十七、十五があつたりと、その順番に整然としたものは感じられない。これは、信友が天治本模写に当たって、書写の順序は行き当たりばったりであったことを示唆するように思われる。そのようなわけで、写された巻次はかなり入り組んでいるが、おおざっぱにまとめれば、

巻二 六丁 巻十 一丁半 巻十四 三丁
 巻十五 四丁半 巻十七 三丁半
 という具合になる。

二

一 検天治本の最大の功績は、この書によって、各巻の奥書が知られることである。巻二、一四、一五、一七という四つの巻の奥書を見ることが出来る。ことに巻二の奥書は重要である（第七丁ウ）。この記述によれば、天治本は、忠兼の本を書写した本であるということになる。しかも、その記述が、同じく忠兼本を祖とした仙覚校訂本に残る忠兼本の奥書とよく似ており、両者相まって、天治本にとっては、底本の忠兼本が讃州本から仙覚校訂本底本に到る系譜に位置づけられる本であることが判明し、仙覚校訂本にとっては、今は無き忠兼本の具体的な姿をうかがうすが

を見出したことになる。天治本は、現在巻一三のほぼ完本（ただし、現在は所在不明）と巻一五の零卷（香川県冠纓神社蔵）というまとまった部分が残っており、そのうちの巻一三の奥書には、「肥後前司本」によるという記述が見られ、その記述単独で、天治本の底本が忠兼の本であることはわかる。とはいえ、仙覚校訂本奥書と照合できる巻二の奥書の存在の意義は大きいと言えよう。これらの記述によれば、天治本の筆者は、天治元年（一一二四）の二月に巻一三を写し、同年八月に巻一四、一五を書写し（巻一七は、奥書はあるが、書写の年などは書かれていない）、巻二は大治四年（一一二九）に書写したことになる。どうしてこのように書写時期が巻によってまちまちなのかは（巻次と書写の順序も合致しない）、今後検討が必要であろう。

三

本書は、天治本の模写なので、当然天治本そのものではない。そうである以上、どの程度実際の天治本の姿を反映しているかという点が問題になる。まずは、歌本文、訓は校訂資料としてどのくらい信頼性があるかと言うことである。模写の信頼性を測るためには、現存箇所と比較していかに実物をよく反映しているかを見極めるのが最も理想的である。しかし、先述のように、本書の模写部分は、現存する部分と一箇所も重なっていない。よって、現存の箇所と本書を比較することは出来ない。しかし、これも先述のように、信友は、巻二については、天治本の校異を『万葉集略解』に書き入れた本が現存する。山崎福之「正しい本文をめぐる課題」（国文学第三五巻第五号 平成二年五月）は、両者を比較して、内容がよく合致することを述べる。稿者ら三人も、本書と信友書き入れの『万葉集略解』の巻二との比較を行ったが、同様の結論に到っ

た。まずは、校異レベルでは本書は天治本を反映したものと言うことが出来る。では、次に写された文字の形のレベルではいかがか。この点については、本書と天治本現物とが重なる部分がない故、確認はさらに難しい。しかし、本書で、天治本の同じ部分を二回模写したところがある。左のような部分である。



右は、第一丁ウの一部、左は第五丁ウの一部である。同じ部分を二度模写したのは、当該部分の紙背にある朱の裏書きを再現するについて、前者では、表面の文字を除いて、裏書きの鏡文字の状態を鮮明に見せる形にし、後者では、表の文字（巻二、二二〇の長歌の一節）と裏書きの文字とが重なっている様を見せるための措置かと推測される。両者は字形から虫食いに到るまでよく似ていることがわかる。ただ、両者において、字形の細かい形や虫食いの細部など、さすがに写真のように正確とは言いがたい。このことから、本書が、透き写しのような正確性までは有していないことは確認される。両者を比較したとき、最も目につく違いは、表面の歌本文の位置と裏書きの位置が双方でずれている点である。この朱の裏書きは、双方とも実際料紙の裏面に書写されており（表面に鏡文字の形で書写しているわけではない）、それが透けて見える形

になつている。表面、裏面それぞれの正確な模写に努めてはいるが、さすがに裏表の位置の照合までは十分に一致させられなかつたのであろうか。

四

天治本は、卷十三、十五にまとまつた部分が残るが、実のところ、他本との関係が明確に知られる箇所はさして多くない。一方、あちらこちらを抄写した本書には、天治本の伝本としての性格がよく表れている点が多い。そのうち一つだけあげるとすれば、卷二の長歌訓があげられる。本書には、卷二の抄写が六丁存するが、そのうち、一九六、一九九、二二〇、二三〇の四首の長歌が収められている（いずれも一部分）。そのうち、訓の部分が残らない二二〇を除く、一九六、一九九、二三〇にはいずれも訓が見られる。天治本卷二は、このほかに断簡で一三一の長歌に訓があることが知られており、訓の有無が確認できる四首中四首に訓があることが知られる。これは、天治本では卷二の十九首の長歌すべてに訓があつたことを示唆するであろう。一般に平安時代の万葉集の平仮名訓の伝本には長歌に訓がない。特に、卷二については他に平仮名訓の本として金沢本、元暦校本、類聚古集が現存するが、いずれにも長歌訓は見られない。平仮名訓の本において、卷二の長歌訓はきわめて希少な存在であつたことが知られる。ところが一方、忠兼本を底本の祖とする仙覚校訂本では、卷二の長歌訓はすべて古点とされている。古点とは、源順らの訓など由来の古い訓を意味する。ところが、仙覚校訂本の長歌の訓は八割強が次点、新点で占められ、古点はきわめて少ない。長歌すべてが古点の巻は卷二に限られる。すると、仙覚校訂本で卷二の長歌だけすべて古点であるのは、底本の祖本である忠兼本（これは、天治本の祖

本でもある）で、卷二の長歌にすべて訓があり、それらを古点として取り込んだためではないかと推察できる。この合致は、仙覚校訂本の底本の祖である忠兼本と天治本の書本である忠兼本がたしかに同じ本であることを証している。

右の事例以外にも、検天治本には、天治本の系統的性格を表す事例に事欠かない。当翻刻の公表を機に、検天治本が万葉集の系統の研究に様々活用されることを願つてやまない。

〔参考文献〕

久松潜一「伴信友の万葉研究―信友書入万葉集について―」国語と国文学第二十二卷第二号 昭和二十年二月

佐佐木信綱『万葉集事典』（諸本―書誌）昭和三十一年

山崎福之「正しい本文をめぐる課題」国文学第三五卷第五号 平成二年

五月

田中大士「万葉集伝来史上の広瀬本万葉集の位置」国文目白 第五十六

号 平成二十九年二月

検天治本万葉集翻刻凡例

- 1 伴信友が模写した検天治本を翻刻したものである。
- 2 信友が天治本を模写した部分とそれに信友が注記を加えた部分とに分かれるが、後者はおおむね朱で注記され、小字になっている。朱で小字である場合は、（朱）と注記され、ポイントを下げているので、それで判断されたい。

- 3 翻刻は、原文なるべく近い字体で行つたが、異体字などは、通用

の字体を用いていることがある。

4 歌番号は、旧国歌大観番号を用いる。

5 丁数を付している。なお、本書には、空白の丁が存する。それらは翻刻の欄にはあえて提示していない。空白の丁は、第六丁ウ、第一〇丁オ、第一三丁ウ、第一五丁オである。

6 原字が不明な場合、虫損などで判読不明な場合などは、その旨を脚注として掲出した。

7 検天治本は、『校本万葉集』新增補（昭和五五―五六年）に校合されているが、今回の翻刻により、『校本万葉集』と見解が異なる箇所が存した。その違いについては、末尾にまとめて注記を付した。

8 検天治本には、二箇所裏書きを模写した部分がある（第一丁ウ・第五丁ウ）。その箇所については、翻刻だけではわかりにくいため、画像を掲載した。なお、画像掲載については、所蔵者の京都大学附属図書館の許可を得ている。

9 本翻刻は、平成二八年度上代文学講義1・2、二九年度の上代文学演習1・2の成果発表に基づき、安井絢子が主として原稿をまとめ、安井と古澤彩子とが内容を検討し、田中大士が全体の点検を行った。この講義に参加した加藤佑美、金子結咲・深野里瑛・吉田怜世に感謝する。なお、解題は、田中が担当した。また、翻刻のフォームは、景井詳雅氏（洛星中・高等学校教諭）作成のものを、景井氏の許可を得て使用している。景井氏には深く感謝申し上げる。

檢天治本万葉集翻刻

〔以下二之卷〕

相聞

難波高津宮御宇天皇代大鷦鷯天皇諡曰仁德天皇

磐姫皇后思 天皇御作歌四首

八五

君姫之氣長成奴山多都祢迎□將行待尔可將待

きみかゆきけななくなりぬ山たつねむかへかゆかんまちにかま

た□

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉

九一

いもかいへもつきてみましをやまとなるおほしまみねにいへもあら
ましを

（一行空き）

〔二丁表〕

（一行空き）

二二〇

玉藻吉讚伎國者國柄加雖見不飽神□□□□

貴寸天地日月與共滿將行神乃御面跡次未中

〔此二行ノ訂写〕乃水門從船浮而吾榜來*

〔見者跡位浪立邊見者白浪散動鯨魚□□□□〕

恐行船乃

* 正脱音尤病也山海經傳澤之水多鯨云々

東宮切韻云似鯉又状如鯉足食之

鯨魚或本作鯨魚

裏書

鯨魚或本作鯨魚

東宮切韻云似鯉又状如鯉足食之

正脱音尤病也山海經傳澤之水多鯨云々

〔二丁裏〕

玉藻去積伎國老國柄か難見不能神
 貴寸天地日月無去滿物乃所而距以未中
 乃火門徑船淳分吾榜車
 見志白浪散動鯨魚及海
 怒行船乃

吳書

鯨魚或平作鯨魚

東宮切韻云似鯉又狀如鯉足食之
 鹿音尤病七山海經使澤之水多鯨之

明日香皇子女木嶋殯宮之時柿本朝臣人麻呂作

一首并短哥

飛鳥明日香乃河之上瀬石橋渡石鏡云下瀬打橋渡石橋石鏡
 生靡留玉藻毛叙絶者生流打橋生乎为礼流川藻毛叙干
 者波由流何然毛或本吾玉乃立者玉藻之如許呂卧者川藻之如
 久靡相之宜君之朝宮乎忘賜哉夕宮乎背賜哉宇都曾
 臣跡念之時春部者花折挿頭秋立者黄葉挿頭敷妙之袖
 携鏡成雖見不獸三五月之益目類染所念之君与時之
 幸而遊賜之御食向木嶋之宮乎常宮跡定賜味澤相

目辞毛絶奴然有鴨云前綾尔憐宿兄鳥之片恋嬌云

乍朝鳥云往來为君之夏章乃念之妻而夕星之彼往

此去大船猶預不定見者遣悶流情毛不在其故为便知

之也音耳母名耳毛不絶天地之旅遠長久思将往御名尔

* 忌世流明香河及万代早布屋師吾王乃形見何此焉

とふとりのあすかのかはのほりせにいしはしわたし

くたりせにうちはしわたしいしはしのおひなひ□□*

るたまもこそたえれはおふるうちはしのおふるをすれる

かはもこそかはけははゆるわきもこもわかおほきみ

* □「たちたれはたまものことくころふせはかはものことく

なひきあひしよろしききみのあさみやをわすれたま

ふやゆふみやをそむきたまふやうつそふとおもひしと

きはるへにはなをりかさしあきたてはもみちを

「二丁表」

* 「忌」ハ上ノ□ハ虫損。「懸」カ。

* 「おひなひ□□」ノ上ノ「□」ハ「き」カ。

「二丁裏」

* 「□たちたれは」ノ「□」ハ「の」カ。

* 「ころふ」ハ何カノ字ノ上ニ重ネ書キセリ。

一九九

かさししろたへのそてたつさはりか、みなるみれとも
 あかぬもちつきのますめつらしみおもほえしきみと
 ときとのみゆきしてあそひたまひしみけむか□
 こかめのやとこみやとさためたまひてあちさはあ

「【三丁表】

ひまこともたえぬしかあるかもあやにあはれにぬえとりの
 か□*こひしつ、あさとりのゆかひしきみのなつくさの
 おもひのかれてゆふほしのあちいきこちくるおほふねの
 やすらふみれはおもひやるこ、ろもあらずそのゆへ□*
 すへもしるしやおとのみもなのみもたえすあめ
 つちのいやとほなかくおもひゆかむみなにかけせるあすか
 かはよろつよまてにはしきやしわかおほきみのかた
 みかこ、も

「【三丁裏】

〈二之卷高市皇子尊城上殯宮之時云々之内〉
 等念麻侶聞之恐久麻侶云云引放箭之繁計久大
 雪乃乱而来礼蔽成曾知余里久礼婆不奉仕立向
 之毛露霜之消者消倍久去鳥乃相競端尔

かけまくもゆ、しけきかもいはまくもあやにかしこ
 きあすか、のまかみのはらにひさかたのあまつみかと
 をかしこくもさためたまひてかみさふといはかくれ
 ますやすみしるわかおほきみのしらしめすそもの

「【四丁表】

くにのまきたてるふわやまこえてかへたちのわざ
 みかはらのかりみやにやすもりましてあめのした

さためたまひしおしくにをさためたまふと□の*
□くあつまのくにのみいくさをめしたまひつ、

「四丁裏」 * 「ふとと□の」ノ「□」ハ「り」カ。

一八八

〔二之卷皇子尊宮舍人等働傷作歌貳十三首之内〕
旦霞日之入去者御立之嶋余下座而嘆鶴鴨

あさくもりひのくれゆけはみたちせししまにおりゐてなげき
つるかも

一八九

旦日照嶋乃御門尔鬱悒人音毛不為者真浦悲毛
あさひてるしまのみかとおほつかなひとおともせねはま□ら

かなしも

「五丁表」

二二〇

〔二之卷之内〕
〔讃岐狭岑嶋視石中死人云々哥之内〕

（此哥ノ
前後上
ニアリ）

及水門從船浮而吾榜来者時風雲居尔吹尔奥*
見者跡位浪立邊見者白浪散動鯨魚取□

（此裏書上ニ写出）

*正脱音尤病也山海經傳澤之水多鯨
東宮切韻云似鯉又状如鯉足食之
鯨魚或本作鯨魚

*裏書（朱）。文字ハ鏡文字。「来者」ノ「者白」ノ
ノ二行ノ裏ニアリ。

二二〇

〔靈龜元年歲次乙卯秋九月志云々之内〕

ひき、つればなきにそなくとかたらへはこ、ろ□
いたさすへらきのかみのおほむこのおほむ□
□たひのひかりそかくてりてあり

* 「□たひのひかりそ」ノ「□」ハ「の」カ。
「五丁裏」

三八九七

□へにてもたゆたふいのちなみのうへにうきてしをれ□
おくかしらすも

三八九七

大海乃於久可母之良受由久和礼乎何時伎麻佐

武等問之兒良波母

三八九八

おほうみのおくかもしらすゆくわれを□□□□□とと^と—
ひしこらはも
大船乃

「六丁表」

二と巻三

漢後獲冬活視在中死人三ノ有之内

此漢書上ノ字出

乃火門從船浮今吾榜未先將何雲佐不吹出風
是玄波住浪三邊見名白浪波動鯨堂取也

雲字之平一咸以子邦新九月を三ノ也

以之了於七しもうよふるしとかこら一はし
いしきもききとらよのかみれ物人ふ物人
馬しよのりつりきりしりりあり

一四一

有間皇子自傷□松枝歌二首*

磐白乃濱松之枝乎引結マコトサチアラハ政本真幸有者亦還見武

いはしろのはま松かえをひきむすひまさしくあら□□*たか
へ□□む

*「□松」ノ「□」ハ「結」カ。

*「まさしくあら」ノ下ノ「□」ハ「は」カ。

二二七八

妻隠矢野神山露霜尔二寶比始散卷惜

つまかくすやの、かみやまつゆしもにほひそめたりち
らまくをしも

〔以上二之卷中抄寫〕

【七丁表】

「 集卷第二

〔十五卷奥書天治元年八月八日於白川房書写云々〕

〔大〕

〔十四卷奥書天治元年八月一日於白川房書写云々〕

〔治四年二月廿六日書寫畢□「 〕

〔天治 保安五四三改元 大治 天治三正廿改元〕

〔後〕

以肥後前司忠兼之本書寫「 〕

江家本孝言本梁園御本「 〕

本比校了由在奥書又以□「 〕

同一校了

〔右二卷奥書〕

【七丁裏】

〔朱〕
〔以下五卷中抄寫下ニモアリ〕
〔朱〕
〔長哥末〕

三六〇五

許曾安我故□夜麻米*

わたつみのうみにいてたるしかまかはたえむひにこそ
わかこひやまめ

右三首戀歌

*「故」ノ下ノ「□」ハ「非」カ。

三六〇六

多麻藻可流乎等如乎須疑弓奈都之佐能野嶋我
左志余伊保里須和礼波

たまもかるをとめ□□き□なつくさの、しまか
さきにいほりすわれは

柿本朝臣人麿歌曰敏馬乎須疑弓又曰布祢知可
豆伎奴

「八丁表」

三六〇七

之路多倍能藤江能宇良余伊射里□流安麻等□□
良武多妣由久和礼乎

しろたへのふちえのうらにいさりするあまとやみら
むたひゆくわれを

柿本朝臣人麿歌曰安良多倍乃又曰須受吉
都流安麻登香□良武

*「香」ノ下ノ「□」ハ「見」カ。

三六〇八

安麻射可流比奈乃奈我道乎孤悲久礼婆安可思能
門欲里伊敵乃安多里見由

あまさかるひなのなちをこひくれはあかしのとより
いへのあたりみ□

柿本朝臣人麿歌曰夜麻等思麻見由

「八丁裏」

三六〇九

武庫能宇美能余波余久安良之伊射里須□安麻□
都里船奈美能宇倍見由

むこのうみにはよくあらしいさりするあまのつり
ふねなみのうへみゆ

柿本朝臣人麿歌曰氣比乃宇美能又曰可里許
毛能美太礼弓出見由安麻能都里船

*「歌」ハ右の□虫損。「歌」カ。

三六一〇

安改乃宇良余布奈能里須良牟乎等女良我安可

*「改」ハ右の□虫損。「故」カ。

毛能須素尔之保美都良武賀

「九丁表」

あこのうみにふなのりすらんをとめらかあ□もの
すそにしほみつ□むか

柿本朝臣人麿歌曰安美能宇良又曰多麻母能

須蘓尔

七夕歌一首

三六一一

於保布祢尔麻可治之自奴伎宇奈波良乎許藝弓

天和多流月人乎登古

お□ふね□まかし、ぬきうなはらをこきて、わ
たるつきひとをとこ

右柿本朝臣人麿歌

〔以上十五卷〕 備後國水調郡長井浦船泊之夜作歌三首*

「九丁裏」

*コノ一行貼書。

〔以下十之卷〕

二二八二

・比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付尔家里

このころのあかつきつゆにわかやとのはきのしたは○い
ろつきにけり

二二九五

・鷹之鳴聲聞苗荷明日從□借香能山者黄始南
かりかねのきこゆるなへにあすよりはかすかの山も
もみちそめなむ

「十丁裏」

*「從」ノ下ノ字ハ何カノ字ヲ消シテ横ニ「者」ヲ
書ケリ。

三四一九

伊可保世欲奈可中次下於毛比度路久麻許曾
之都等和須礼西奈布母

諸本假名落
雖然以孝イカホセニナカくスカニオモヒトルクマコソシツトワスレセナフモ*
本書入丁

*訓ノミ朱書。

三四四一 麻等保久能久毛為尔見由流伊毛我 敵尔伊都可伊

多良武安由賣安我古麻

まとかくほのくもゐにみゆるいもかいゑにいつかいたらん

* まかいほたらむあゆめあかこま

をくさをとをくさすけほとしをふねのならへて

みれはをくさかちめり

くへこしにむきはむこまのはつゝにあひみしこ

らしあやにかなしも

「【十一丁表】

* 「まかいたらむ」ヲ線デ消セリ。

「【十一丁裏】

二二二八

・一年三遍不行秋山乎借尔不飽過之鶴鴨

ひと、せにみかへりゆかぬあきはやまきをころにあかすすこ
しつるかも

二二四四

・すみよしのきしをたにはりまきしいねのしかも
かるまてあはぬきみかも

（以上十之卷中抄写）

「【十二丁表】

（以下十四之卷中抄寫）

三四〇一

なかはなにうきをるふねのこきてなはあふ事
かたしけふにしあらずは

三四一二

カミツケノクロホノネロノクスハカタカナシケコラニアサカリクモ

三四一三

刀祢河伯乃可波世毛思良受多和多里奈美尔

安布能須安敵流君可母

トネカハノカハセモシラスタ、ワタリナミアフノスアヘルキミカモ

「【十二丁裏】

三五三八

比呂波之乎宇馬古思我祢弓已許呂乃未伊母我理
夜里弓和波已許尔思天

ヒロハシラムマコシカネテコ、ロノミイチカリヤリテワハコ、ニシテ

或本哥發句曰乎波夜之尔古麻乎波左佐氣

三五三九

安受乃字弊尔古馬乎都奈伎弓安夜抱可等比登

豆麻古呂乎伊吉尔和我須流

あすのうへにこまをつなきてあやほかとひとつま
ころをいきにわかする

「【十三丁表】

挽歌

三五七七

可奈思伊毛乎伊都知由可米等夜麻須氣乃曾我比

尔宿思弓伊麻之久夜思母

かなしいもをいつちゆかめとやますけのそかひに
ねしていましくやしも

以前歌詞未得勘知國土山川之名也

(一行空き)

萬葉集卷第十四

「【十四丁表】

(二行空き)

(卷)
自天治元年
至弘化二年七
百五十年

天治元年八月一日於白川房書寫了即一校了

* □ 鶏ノヲロノハツヲニ鏡カケ 遊布麻山 於保乎曾鳥

* □ 八「山」カ。

三六二七

クヘコシニムキハムコマノハツ〜ニ アシヒキノ山カツラカケ

葦葉ニ夕霧立テカモカネノサムキユフヘシナラハシノハム

御社ノスカヘニタテルカホカハナ、サキイテソネコメテシノハム

宇家良花 登我利

武藏哥曰ウケラカハナノトキナキ物ヲ 又曰ウケラカ花ノイロニイツナユメ

此卷極以依狼藉以故中務大輔本能々比较了云本如此

〔以上十四之卷中抄寫〕

〔十四丁裏〕

〔以下十五之卷 上ニモアリ〕

安佐散礼婆伊毛我手尔麻久可我美奈須美津能

波麻備余於保夫祢尔真可治之自奴伎可良久尔々和多

理由加武等多太牟可布美奴面乎左指天之保麻知

弓美乎妣伎由氣婆於伎敵尔波之良奈美多可美宇

良末欲理許藝弓和多礼婆和伎毛故尔安波治乃之

〔十五丁裏〕

* 訓ハ朱書。

* 「真」ノヨウナ字ヲ消シ右ニ墨デ「真」アリ。

* 二字分相当カ。不明。

麻波由布住礼婆久毛為可久里奴左欲布氣之由久敵

乎之良尔安我已許呂安可志能宇良尔布祢等米

弓宇伎祢乎詞都追和多都美能於積敵乎見礼婆

伊射理須流安麻能乎等女波小船乘都良 尔宇

家里安香等吉能之保美知久礼波安之辨尔波多豆

奈伎和多流安左奈藝尔布奈弓乎世牟等舩人毛

鹿子毛許惠次妣柔保等里能奈豆左比由氣婆伊

敵之麻波久毛為尔美延又安我毛敵流許己呂奈具也

* 前行「弓」ノ異文カ。

* 八不明。

* 八不明。

〔十六丁表〕

* 「ノ」ハ何カノ字ニ重ネ書キセリ。元字不明。

トハヤクキテミムトオモヒテオホフネヲコキ
等波夜久伎弓美乎等於毛比弓於保夫祢乎許藝
和我由氣婆於伎都奈美多可久多知伎奴与曾能
フカユケハオキツミタカクタクキスヨソノ
未ル見都追須疑由伎多麻能宇良尔布祢乎等杼
メハマヒヨリウライソヨミツ、ナクフノス
米弓波麻備欲里宇良伊蕪乎見都追奈久古奈須
祢能未之奈可留和多都美能多麻伎能多麻乎伊
ハットニイモニヤラムトヒコヒトリソテニハ
敞都刀尔伊毛尔也良牟等比吕比登里素弓尔波伊
礼弓可敞之也流都可比奈家礼婆毛礼杼毛之留思
乎奈美等麻多於伎都流可毛

【十六丁裏】

三六二八

反歌二首

多麻能宇良能於伎都之良多麻比和敷礼杼麻多曾
於伎都流見流比等乎奈美
たまのうらのおきつしらたまひらふれとまたそおき
つるみる人をなみ

三六二九

安伎左良婆和我布祢波弓牟和須礼比与我世伎弓
於家礼於伎都之良奈美
あきさらはわかふねはいてむわすれかひよせきて
おけおきつしらなみ

【十七丁表】

萬葉集卷第十五

天治元年八月八日於白川房書寫了即一校了
於本者以多本比较□由載表紙也

*□ハ「了」カ。
【十七丁裏】

三九一六

(以下十七之卷中)

橘乃余保弊流香可聞保登等藝須奈久欲乃

雨余宇都路比奴良牟

たちはなのほへるか、もほど、きすなくよのあめにうつろひぬ覧

三九一七

保登等藝須夜音奈都可思安美指者花者須具

登毛可礼受加奈可牟

ほど、きすよこゑなつかしあみさ、は花はすくともかれすかなかむ

三九二二

ふるゆきのしろかみまてにすめらきにつかへまつれはたうとくもあるか

三九四六

ほど、きすなきてすきにしをかひからあきかせふきぬよしもあらなくに

三九四七

けさのあさけあきかせさむしとほつひとかりかきなかむときちかみかも

三九五四

こまなへていさうちゆかなしふたにのきよきいそまによするなみ□に

「【十八丁裏】

三九六八

沽洗二日大伴宿祢池主

三九六九

更贈歌一首并短歌

含弘之徳垂思蓬體不賁之恩報慰陋心載荷

「【十八丁表】

未春无堪所喻也但以稚時不涉遊藝之庭橫翰之藻自乏乎彫蟲焉幼年未遙山柿之門栽歌

之趣詞失乎聚林矣忽見以藤續錦之文追慙

庸淺之作然惟古人无言不酬今者之意孰能

非報乎哉因以述懷賦題煩重敬和其歌曰

「【十九丁表】

更題將石同瓊之詠固是俗愚懷癖不能默

已仍捧數行式酬嗤咲其詞曰

三九九〇

我和勢故波多麻尔母我毛奈手尔麻伎氏見都追由
可牟乎於吉氏伊加婆乎思

本二片假名

わかせこはたまにもかもなてにまきてみつ、ゆかむ
をおきていかはをし

「【十九丁裏】

四〇〇四

多知夜麻尔布理於家流由伎能等許奈都尔氣
受弓和多流波可无奈我良等曾

たちやまにふりおけるゆきのとこなつにけすて
わたるはかむなからとそ

此哥或本有上歌之上

於知多藝都可多加比我波能多延奴期等伊麻見

流比等母夜麻受可欲波牟

おちたきつかたかひかはのたえぬこといまみるひ
ともやますかよはむ

右掾大伴宿祢池主和之四月廿八日

(一行空き)

「【二十丁表】

(一行空き)
 萬葉集卷第十七
 (一行空き)

自校了於本者以多本校之由被書付也

「二十丁裏」

『校本万葉集』新增補との差異一覧

- 1 本稿の翻刻と、『校本万葉集』新增補における『検天治本万葉集』の翻刻とを比較し、差異のあるところを抜き出したものである。ただし、題詞・歌・左注の文字の大小、また、字体に関してはその差異を挙げない。
- 2 『校本万葉集』新增補の翻刻については旧字体を新字体に改めて抜き出し、本稿の翻刻については翻刻の通りに抜き出す。
- 3 表の「丁数」には、本稿において示した丁付を示し、「歌番号」と、その歌の「題詞／前文／左注／歌／奥書／他」のどの部分の差異であるのかを示した。「他」については、以下の分類をして、どの部分の差異であるかを示した。

◇他・信友書入：伴信友の書き入れと思われるものについての差異を示す。

◇他・裏書：二丁裏及び五丁裏に見られる裏書についての差異を示す。

◇他・異本注記等：異本注記等、書き入れがある箇所についての差異を示す。なお、異本注記等の差異を抜き出すに際しては、本文を示し、その書き入れのある位置を示した上で、差異を示す。

丁数	歌番号	題詞／左注／歌／他	当該翻刻	新增補翻刻
一丁表		他・信友書入	(以下二之卷)(朱)	記述なし
一丁表	八五	歌	「山たつね」	「やまたつね」
一丁裏	二二〇	他・裏書	* 「音尤病也」	「音尤病也」 ■部分手書き。
一丁裏	二二〇	他・裏書	* 「山海経傳」	「山海経徳」
一丁裏	二二〇	他・裏書	■「音尤病也」	「音尤病也」 ■部分手書き。
一丁裏	二二〇	他・裏書	「山海経傳」	「山海経徳」但し、「徳」ハ人偏ニ作」とする。
二丁表	一九六	題詞	「人麻呂」	「人磨」
二丁裏	一九六	歌	「御名忌流」	「御名懸流」

二丁裏	一九六	歌	「たまもこそたえれはおふる」	「たまもこそたゆれはおふる」
三丁表	一九六	歌	「わかおほきみ□たちたれは」	「わかおほきみのたちたれは」
三丁裏	一九六	歌	「か□こひしつ、」	「かたこひしつ、」
四丁表	一九九	歌	「そのゆへ□」	「そのゆへを」
四丁裏	一九九	歌	「あすかのの」	「あすかの」
四丁裏	一九九	歌	「やすもりまして」の「やす」右に「に」あり。	「やすもりまして」
五丁表	一八八	歌	「と□の□く」	「とりの□く」
五丁裏		他・信友書入	「巨霞」	「巨霞」
五丁裏		他・信友書入	「二ノ巻ノ内」(朱)	記述なし
五丁裏		他・裏書	「此裏書上ニ写出」	記述なし
五丁裏		他・裏書	「音尤病也」	「音尤病也」■部分手書き。
五丁裏		他・裏書	「澤之水多鱗」	「澤之水多鱗集」
六丁表	三八九七	歌	「おほむ□□たひのひかりそ」	「おほむ□□たひのひかりそ」
七丁表	一四一	題詞	「□□□□□とま」の右「と、」	「と、」に当たる部分手書き。
七丁表	一四一	歌	「松枝二首」	「結松枝二首」
七丁表	一四一	歌	「いはしろのはま松かえを」	「いはしろはままつかえを」とし、「カ」ニ相当スル字小サク、「の」カ「か」カ明ナラズ」とする。
七丁表	二一七八	歌	「まさしくあら□□たかへ□□む」	「まさしくあらはまたかへり□□む」
七丁裏		他・信友書入	「露霜爾ニ寶比始」	「露霜爾、寶比始」
七丁裏		他・信友書入	「以上二之巻中抄寫」(朱)	記述なし
七丁裏		他・信友書入	「右二卷奥書」(朱)	記述なし
八丁表		他・信友書入	「以下五巻中抄寫下ニモアリ」	記述なし
八丁表		他・信友書入	「長哥末」(朱)	記述なし
八丁表	三六〇五	歌	「安我故□夜麻米」	「安我故非夜麻米」
八丁表	三六〇五	歌	「たえむこひにこそ」	「たえむひにこそ」
八丁表	三六〇六	歌	「野嶋我左志余」	「野嶋我左□爾」
八丁表	三六〇六	歌	「をとめ□□き□」	「をとめ□□きて」
八丁裏	三六〇七	歌	「伊射里須流」	「伊射里須流」
八丁裏	三六〇七	左注	「安麻登香□良武」	「安麻登香見良武」
八丁裏	三六〇八	歌	「いへのあたりみ□」	「いへのあたりみゆ」

九丁表	三六〇九	歌	〔伊射里須流〕	〔伊射里須流〕
九丁表	三六〇九	左注	〔柿本朝臣人麿歌〕	〔柿本朝臣人麿歌〕
九丁表	三六一〇	歌	〔安故乃宇良爾〕	〔安故乃宇良爾〕
九丁裏	三六一〇	歌	〔ふなのりすらん〕	〔ふなのりすらん〕
九丁裏	三六一〇	歌	〔あかもものすそに〕	〔あかもものすそに〕
九丁裏	三六一〇	歌	〔しほみつ□むか〕	〔しほみつらむか〕
九丁裏	三六一一	歌	〔お□ふね□〕	〔おほふねに〕
九丁裏	三六一一	歌	〔以下十五卷〕(朱)	記述なし
十丁裏	二一九五	他・信友書入	〔以下十之卷〕(朱)	記述なし
十丁裏	二一九五	歌	〔黄始南〕	〔黄始南〕
十一丁表	三四四一	歌	〔我 敵尔〕	〔我敵尔〕とあり、「我」の下に一字分の空白なし
十一丁表	三四四一	歌	〔まとかくの〕	〔か〕の字手書き。
十一丁裏	三四四一	歌	〔まかいたらむ〕	〔ま〕の字手書き。
十一丁裏	三四五〇	歌	〔をくさすけほと〕	〔をくさすけをと〕
十二丁表	二二一八	歌	〔ころに〕	〔ころに〕の三字及び「こ、」の二字手書き。
十二丁裏		他・信友書入	〔以上十之卷中抄写〕(朱)	記述なし
十二丁裏	三四〇一	歌	〔以下十四之卷中抄写〕(朱)	記述なし
十二丁裏	三四〇一	歌	〔なかはなに〕	〔なかまなに〕
十二丁裏	三四〇一	歌	〔あふ事かたし〕	〔あふことかたし〕
十二丁裏	三四一二	歌	〔イヤサカリクモ〕	〔イヤサカリクモ〕
十三丁表	三五三八	歌	〔イモカリヤリテ〕	〔イモカリヤリテ〕「ラ」ヲ墨ニテ消セリ」とする。
十三丁表		他・信友書入	〔ワ片假名ノワ也輪ニ象リ兼テ戯書セルニヤ〕(朱)	記述なし
十四丁裏	三五七七	歌	〔伊都知由可米等〕	〔伴都知由可米等〕
十四丁裏		他・奥書	〔□鶏〕	〔山鶏〕
十四丁裏		他・奥書	〔ムキハムコマノ〕	〔ムキハムコマカ〕
十四丁裏		他・信友書入	〔以上十四之卷中抄写〕(朱)	記述なし
十五丁裏		他・信友書入	〔以下十五之卷上ニモアリ〕(朱)	記述なし

十五丁裏	三六二七	他・異本注記等	「布」の左「 ■ 」	「 ■ 」にあたる二字手書き。但し字は不明。
十五丁裏	三六二七	歌	「可良久久々」	「可良久久々」
十五丁裏	三六二七	歌	「宇良未欲理」	「フ」にあたる字手書き。
十五丁裏	三六二七	歌	「和伎毛故尔」	「和伎毛故尔」
十六丁表	三六二七	歌	「由布住礼婆」	「由布住礼婆」「柀」にあたる字手書き。「モト」「柀」ナドアリシヲ消セルカ」とする。
十六丁表	三六二七	歌	「久毛為可久里奴」	「久毛為可久里奴」
十六丁表	三六二七	歌	「布柀等米豆」	「豆」の字手書き。
十六丁表	三六二七	歌	「宇伎柀乎詞都追」	「宇伎柀乎詞都追」
十六丁表	三六二七	歌	「都良 余宇家里」	「都良 余宇家里」
十六丁表	三六二七	歌	「久毛為余美延奴」	「久毛為余美延奴」
十六丁裏	三六二七	歌	「多可久多知伎奴」	「知」の字手書き。
十六丁裏	三六二七	歌	「布柀乎等杼米豆」	「布柀乎等杼米豆」
十七丁表	三六二八	歌	「みる人をなみ」	「みるひとをなみ」
十七丁裏		他・奥書	「比較□由」	「□を「之」とする
十八丁表	三九一六	他・信友書入	「以下十七之卷中」(朱)	記述なし
十八丁表	三九一七	歌	「うつろひぬ覧」	「うつろひぬらむ」
十八丁表	三九一七	歌	「花はすくとも」	「はなはすくとも」
十九丁表	三九六九	前文	「不貲之恩」	「不貲之思」

安井絢子 (日本女子大学大学院博士課程後期在学)

古澤彩子 (同博士課程前期在学)

田中大士 (日本女子大学教授)

Typeset Version of the Ken Tenji-bon Text of the Man'yōshu

YASUI Ayako, FURUSAWA Ayako, TANAKA Hiroshi

[**Abstract**] The Ken Tenji-bon text of the Man'yōshu is a copy made during the Edo Period by the scholar of Kokugaku (ancient Japanese thought and culture) Ban Nobutomo (1773-1846) of the Tenji-bon text, a copy of the Man'yōshu that had been made during the Heian Period. The Tenji-bon text is an important early manuscript text of the Man'yōshu that was copied around the time of the Tenji era (1124-1126). The only portions presently extant are partial texts of Book 13 and Book 15, and fragments of Book 2, Book 10, Book 14, and Book 15. During the Edo Period (17th-19th centuries), Books 2, 10, 14, 15, and 17 of the Tenji-bon text were in the collection of the Manshu-in Temple in Kyoto. The Kokugaku scholar Ban Nobutomo made a reproduction of portions of that text in 1845 and had the copy made up in books with traditional double-leaved binding (the Tenji-bon text was in the form of scrolls). This reproduction was made in careful detail that extended even to wormholes in the paper, and so has passed down quite an accurate image of the Tenji-bon text to the present day. Furthermore the reproduced portions are extremely precious because they all show parts of the Tenji-bon text that have not otherwise survived.

Although the Tenji-bon text has preserved some portions that are complete, such as in Book 13 and Book 15, those surviving portions do

not, as it happens, contain more than a few places that prominently display the distinctive characteristics of the Tenji-bon textual lineage. The Ken Tenji-bon text, on the other hand, consists of excerpts copied from different places in the books that existed at that time, but those excerpts clearly display the distinctive characteristics of the textual lineage. This text preserves numerous portions that clarify the relationship between the Tenji-bon text and other texts, prominently including the postscript to Book 2 stating that the Tenji-bon text was copied from the Tadakane-bon text (an important historical text that was the original source for the source text to the Sengaku recension).

The present volume presents the portions copied from the Tenji-bon text together with notes (rubrics) by Ban Nobutomo. The intention of this typeset version is to provide as faithful an image as possible of this text in its aspect as a copy of the Tenji-bon text while clearly indicating the differences from that text.

[**Keywords**] Man'yōshu, Ken Tenji-bon text, Tenji-bon text, Ban Nobutomo, copy